

即時的他者関係に生きる野宿生活者

—北九州市の事例から—

刈茅美紗子

北九州市立大学文学部人間関係学科

要旨

断続的・流動的・刹那的・機会主義的な他者関係を本論文では「即時的人間関係」と呼ぶ。野宿生活者の中には一般の人々と比較して、「即時的他者関係」しか結ばないという特徴がある。彼らはどのようなきっかけでそのような人間関係を結ぶようになったのか。北九州市内で16年以上炊き出しなどの支援活動をつづける北九州ホームレス支援機構も野宿生活者の人間関係を問題視し、「関係性の回復」を重要視している。彼らがそのような即時的な他者関係を結び続ける原因は多様にある。野宿生活前から持ち合わせたパーソナリティや、「ホームレス」というレッテルに自尊心を傷つけ、他者との接触到消極的になったがためだけではない。彼らが即時的他者関係を結びつづけるのは、その日暮の生活感覚、将来設計のなさ、流動的グループ形態など野宿生活開始後の外的要因にも関係している。本稿ではこの点を明らかにすることで、野宿生活者への支援のあり方を提案する。

目次

第一章	野宿生活者概要	第三章	即時的他者関係
第一節	北九州市の野宿生活者	第一節	定義
第二節	行政の支援	第二節	個人にみられる即時的関係
第二章	関係性の有無	第三節	グループにみられる即時的関係とは
第一節	支援機構の「関係性の回復」	第四章	考察
第二節	関係性と自尊心	第五章	結論

はじめに

断続的・流動的・刹那的・機会主義的な他者関係を本論文では「即時的他者関係」と呼ぶ。野宿生活者の中には一般の人々と比較して、「即時的他者関係」しか結ばないという特徴がある。彼らはどのようなきっかけでそのような人間関係を結ぶようになったのか。市内で16年以上も炊き出しなどの支援活動をつづける北九州ホームレス支援機構も野宿生活者の人間関係を問題視し、「関係性の回復」を重要視している。彼らがそのような即時的な他者関係を結び続ける原因は多様にある。野宿生活前から持ち合わせたパーソナリティや、「ホームレス」というレッテルに自尊心を傷つけ、他者との接触到消極的になったがためだけではない。彼らが即時的他者関係を結びつづけるのは、その

日暮の生活感覚、将来設計のなさ、流動的グループ形態、など野宿生活開始後の外的要因にも起因している。本稿ではこの点を明らかにすることで、野宿生活者への支援のあり方を提案する。

第一章 野宿生活者概要

第一節 北九州市の野宿生活者

現在北九州市内には約450人に野宿生活者がいるといわれている。

ここでは「第2次北九州ホームレス実態調査報告書」から市内の野宿生活者をみていく。この調査は面接による聞き取り調査で3日間で149人に対し行われた。なお、この報告書では『野宿生活者(ホームレス)に関する総合的調査研究報告』(大阪市立大学都市環境問題研究会編、200

1)のデータとの比較も行われているので、ここでも比較のため大阪市のデータも抜粋した。

(1)性別

北九州の調査では男性が96.0%、女性が4.0%であり、圧倒的に男性が多い。大阪市もほぼ同様でその97%が男性である。【図1】

(2)年齢

北九州調査では最も若くて30歳、最高齢は80歳、平均年齢は、56.5歳である。年齢層では「30歳代」が3.4%、「40歳代」が14.1%、「50歳代」が45.6%、「60歳代」が31.5%、「70歳代」が5.4%となっている。

大阪調査では、最も若くて28歳、最高齢は85歳、平均年齢は55.8歳である。【図2】

(3)出身地

北九州調査では、「北九州市」出身者が41.3%で最も多く、ついで「福岡市」の3.5%が続く。市内出身者が圧倒的に多い。

都道府県レベルで見れば「福岡県」出身者は57.7%、「山口県」が9.4%、「熊本県」「長崎県」「鹿児島県」がともに4.7%である。九州(沖縄県含む)・山口圏内出身者の合計は89.3%であり、ほとんどがこの九州・山口圏内の出身者である。

それに対して大阪では、「大阪府」出身者はわずか17.9%であり、近畿圏全体でも28.3%である。地方別に見ると「九州」の26.8%を筆頭に、中・四国出身者もそれぞれ11.9%、12.0%となっている。【図3】【表1】

(4)野宿経験と期間

「5年未満」の人が全国では62.7%に対し、北九州の第1次調査では78.1%、第2次調査でも77.9%と、「5年未満」の比率が高い。【図4】

(5)野宿期間(5年未満の人のみ)

「1年未満」が31.0%、1年—2年未満が14.7%、2年—3年未満が24.1%、「3年—4年未満」が16.4%、「4年—5年未満」が13.8%である。「1年未満」が約3割を占めて最も多く、3年未満までが約7割を占める。

以上の調査結果から、北九州市の野宿生活者には、市内出身者が非常に多い、野宿期間の比較的短い人が多いという特徴が浮かび上がる。【図5】

第二節 行政の支援

厳しい経済情勢の下、ホームレスは増加傾向にあり、全国的な社会問題となっている。このような背景から、ホームレスの自立支援などに関する施策を総合的に推進するため、平成14年7月31日に「ホームレスの自立の支援などに関する特別措置法」が成立、同年8月7日に交付・施行された。

《法においては、ホームレスの自立支援等に関する施策の目標を明示するとともに、国または地方公共団体の責務として、こうした目標に関する総合的又は地方の実情に応じた施策の策定及び実施を位置付け、国においてはホームレスの実体に関する全国調査を踏まえ、ホームレスの自立の支援等に関する基本方針を策定し、また地方公共団体においては必要があると認められるときは、この基本方針等に即し、ホームレスに関する問題の実情に応じた施策を実施するための計画を策定しなければならないこととされている。》(「ホームレスの自立の支援などに関する基本方針」平成15年7月31日発表)

北九州市の支援は、行政の行う支援と民間団体の行う支援の2つに大別できる。本稿では民間支援団体として北九州ホームレス支援機構をとりあげる。大まかに言うと、市が主に行うのは就労支援であり、民間支援団体が主に行うのは生活保護受給支援である。北九州市は2004年10月に自立支援センターを開設し、65歳以下の就労の意志のある者に就労支援を行っている。一方、就労の可能性のない者に対しては生活保護を支給することになる。ただし、生活保護の受給には住所設定が必要であり、野宿生活者がアパートを借りる際には、民間支援団体が住所設定を世話し、保護受給にこぎつけるのが大半で、この場合の支援を主体的に行っているのは市ではなく、民間支援団体といえる。

第二章 関係性の有無

本稿では野宿生活者に特徴的にみられる断続的・流動的・刹那的・機会主義的他者関係を便宜的に「即事的他者関係」と名づけている。

そくじ【即事】:

即座の事柄。眼前のこと。その場のこと。〔広辞苑〕

本稿では「継続性がなく当人が寝食を満たすために必要なときに限り持つ、必要最小限の関わり」を「即事的他者関係」と定義する。即事的他者関

係において彼らは人とのやりとりは場当たりの・断続的で、グループの入れ代わりは流動的である。この定義を前提に、以降では野宿生活者に特徴的な他者関係とその原因について考察する。

第一節 支援機構の「関係性の回復」

北九州ホームレス支援機構の前身「北九州越冬実行委員会」を、1988年に炊き出しを始めた黒崎カトリック教会(北九州市八幡西区)の信徒有志らは、89年3月に設立した。北九州越冬実行委員会は1994年以来自立支援事業として居宅(アパート)設定を行ってきた。2000年1月に「北九州ホームレス支援機構」として法人化する。2001年5月に「自立支援住宅」を開設し、生活保護受給に必要な「住所」を提供して、支援住宅入居期間中に貯めた生活保護費を資金とする民間アパートなどへの転居、自立の支援を行っている。

関係性の喪失

北九州ホームレス支援機構の活動を特徴づけるものとして「関係性の回復」というテーマがある。これは野宿生活者の多くが人格関係の喪失(ホームレス)状態であることを前提としている。

この点に関して北九州ホームレス支援機構代表の奥田氏は

「彼らは「ホームレス」と呼ばれています。なぜ「ハウスレス」ではなく「ホームレス」なのか。それは「ホームレス」と言う言葉が単に「宿無し」を指す言葉ではないからです。「宿無し」なら「ハウスレス」でも良いはずですが。例えば「ホームタウン」は、単なる「町」を指すのではなく「故郷」とか「心の拠り所」という意味があり、「ホームシック」は海外生活などでさびしくなり病気になることです。物理的な意味で家を懐かしんでいるわけではありません。人は「関係」を懐かしんで病気になるのです。だから、「ホーム」という言葉には、家族関係とか、人と人との関係性という意味があるのです。「ホームレス」はこの関係の喪失を指す言葉であると言えます。彼らは家がない(ハウスレス)という物理的困窮状況に加え「ホーム」に象徴される人間関係においても困窮(ホームレス)状況にあるのです。「ホーム」は関係概念であり、私達を支える基本的な帰属共同体を指す言葉です。「関係の喪失」、「無縁性」が「ホームレス」のも

う一つの本質的問題なのです。》(『あんたも わしも おんなじいのち 第4号』北九州ホームレス支援機構 2003)と述べている。

野宿生活者が社会資源や家族との関係を絶たれた状態であることは、筆者も支援機構の社員となって活動に参加する中で実感した。しかし、かれら野宿生活者は人間関係すべてを喪失した状態にあるのだろうか。物理的に困窮した状態にあるからこそ、非野宿生活者よりも野宿生活者には必要に迫られた協力関係が存在するのではないかと想像できる。そして実際野宿生活者内には他の野宿生活者との間に協力関係がみられる。

前出の「第2次北九州ホームレス実態調査 報告書」では「現在、野宿をしている人とのつきあいはあるか」の項目への回答結果から次のような分析がされている。

「現在、野宿をしている人とのつきあいは、意外と多く、68.9%の人が「つきあいはある」と答えている。ホームレスになる前の家族関係、近隣関係の希薄さと対照をなしているようにも思われる。「特に親しくつき合っている」人が「まったくない」という人は34.1%であるから、「1人」以上いる人が65.9%いるわけである。》[稲月 2004]

上記のように「親しくつき合っている」と答える人が6割いる一方で

「ただし、別の質問で「まわりにたくさん人がいるが、いざとなれば頼れる人はいない。みんな結局はひとりぼっちだ」という項目に対して62.4%の人が「全くそうだと思う」と答え、19.5%が「まあそうだ」と答えている。》[稲月 2004]

「全くそうだと思う」、「まあそうだ」をあわせた約8割の人が「まわりにたくさん人がいるが、いざとなれば頼れる人はいない。みんな結局はひとりぼっちだ」と考えているのは注目すべき点である。当事者がその関係が希薄であることを自覚した上での関係として存在するのではないか。

第二節 関係性と自尊心

ここでは野宿生活者の他者との関わりについて、自尊心の形成という観点から考察する。なお、以降の個人名は仮名を用い、男性名をアルファベット大文字でA、B、C・・・とし、女性名をアルファベット小文字でp、q・・・として表記する。

以降、事例を取り上げる際にはその節の最初に簡単に人物紹介をしている。

・A氏について

A氏は野宿生活は通年で10年以上になる。北九州市以外での野宿経験はない。勝山公園で野宿生活をして一年半になる57歳男性である。センター入所も頑なに拒み、市の支援策に対する批判も多い。

野宿生活では酔っ払いや少年による襲撃に遭ったり、市民の軽蔑の視線を浴びたり、野宿生活者は人によって程度の差こそあれ、何らかの精神的ダメージを受ける。このことについて支援住宅に入居し、現在は「自立」生活を送る、ある女性は野宿当時の経験をつぎのように語った。

夫の暴力が原因で家を飛び出し、公園の公衆トイレで暮らしていた。野宿しているということだけで警察に二度パトカーに乗せられ暴言を浴びせられた。パン屋にパンの耳をもらいに行ったときも嫌なものを見るような目でみられた。

他都市と同様に北九州市内でも、酔っ払いや少年などによって毛布に火をつけられたり、小屋に花火を投げ込まれたりといった襲撃事件が幾例も支援機構に報告されている。このように野宿生活者は罵声、襲撃、冷たい視線によりその自尊心を傷つけられる。このような状況下で即事的関わりしか持たないことは、野宿生活の中で傷つけられた自尊心を回復する機会を自ら減らすことになると考えられる。このように考察する根拠を以下に述べる。

「ホームレス」の人々の自己評価について『共生社会とNPO』の中で島和博は次のように述べている。

「野口道彦は「支配的な見方を多少なりとも内面化してしまった者が、そこから自らを解放するときに『誇り』は不可欠なものである」と指摘したのですが、「自業自得」の観念はこの「誇り」をも徹底的に奪い取っています。「こうなったのもすべて自分のせいだ」、「自分がばかをやったこうなったのだから、誰にも文句はいえない」、「全部自分が悪いのだ」等等、しばしばホームレスによって異口同音に表明されるこうした言葉は、彼ら自身がいかに深く「自業自得」の観念に囚われ、その結果「誇り」を奪われ、そして自虐と自閉へと追い込まれているということを示しています。》[島2003]

野宿者は「野宿者」たる自己への評価を「自業自得」観念によって低めさせられてしまうが、同様かそれ以上に野宿者である他の人のことを低く評価し、他の野宿者と自分は違う、一緒にされたくないと考える。

この点について岩田正美はその著書『ホームレス／現代社会／福祉国家「生きていく場所」をめぐって』の中で

「さらに、インタビューの中で強い印象を受けたことの一つに、「俺」「(ほかのホームレスとしての)あいつら」「世間」という三つを仕分けた、彼らの語りがある。ここで当事者である「俺」は、ほかの「ホームレス」である「あいつら」とは区別されたものとして、しばしば語られている。それは、「われわれ」＝「一般社会」対「かれら」＝「ホームレス」というような二区分でこの問題を見ようとする外側の視線に対して、「俺」は「ホームレス」という集団に一体化されない、と叫びたいこれらの人々の思いが凝縮されているかのようである。》[岩田2000]と語っている。

以降に挙げる、A氏の『官報』(註1)調査に対する強いこだわりやブルーシートへの嫌悪からは他の野宿者と自分は違うと考えることで自尊心を保っている向きがあるように考えられる。

『官報』調査

A氏は支援機構そのものに対して否定的なわけではない。しかしただ1つ、支援機構が野宿をしていた人の葬儀をあげることにに対しては強く異を唱える。本来、無縁仏が出て市町村が葬儀をあげた場合にはその市町村長名義で『官報』に遺品等の情報を載せるのだが支援機構が野宿者の葬儀をして市がその責任をせず済んでしまうと、『官報』にも掲載されないのだと氏は主張する。細かい字で埋められた分厚いメモを見せながら、「2年間ひとつも載せられてないんよ」と苛立った様子をみせる。『官報』を見た遺族が訪ねてくるかもしれない機会を結果的に奪っているのだと氏は言っているのである。無縁仏になる人というのは全国を転々としている場合が多いので地方紙や地域ごとに内容の異なる全国紙に掲載されるより、全国同一内容の『官報』に掲載することに意味があるのだ、と。支援機構に対して「葬儀をするんだったら遺族探しをボランティアとしてはすべき」と氏は考える。「そうすれば自分のように無縁仏にな

るような人は少なくなるはず」。A氏自身は無縁仏になる心積もりがある。「10年以上前、戸畑の祭りで1度たまたま会って再婚のことをきいた」がそれ以後の妹さんら家族の消息については知らないという。「人の家庭のことにはもうタッチしない」という。

A氏は1年以上の官報調査を続け、この先も2005年の3月までは官報を調べるため、センターには入れないというほど彼の生活の中で重視している。この官報調査は、本来身元不明の遺体が発見された当該市町村の首長名で、遺品など身辺情報を掲載し、遺族探しするものを、北九州市では支援機構が葬儀を行っているため、結果として遺族が野宿生活者の死を知る機会を奪っているとA氏は考え、問題視している。A氏は野宿生活者一般がそのような事態に陥ることを問題視しているのであり、A氏自身は15年間面倒をみた妹家族に「タッチしない」という。先述した通り、筆者にはA氏が官報調査をする理由が全く理解できなかった。ただ調べるだけで自らの消息を家族に伝えたいわけでもないというのである。実際彼はこの先妹家族とは会うつもりはないようだ。氏が野宿生活者一般のためにそのような行いをしているともいえない。仮にそうであるならば、調べた後に何らかの問題提起を行う必要がある。だが、氏の目的は調べること自体なのである。A氏の、ただ調べることだけが目的だといっている官報調査には、会わない、会えない家族でもその存在が彼の拠り所であり、死亡した際には知って欲しいというせつない希望があるのではないか。

事例

A氏は野宿生活を始めて10年以上になるが、その間、「名古屋とか全国へ」出稼ぎに出ている。氏は出稼ぎ先からは毎回奥田さんに電話をかけていたという。その理由は、仕事をする際必要となる緊急連絡先として、東八幡キリスト教会を設定させてもらうためだ。だから氏は奥田氏ならA氏がいつでもどこに行っていたかほぼ知っているのだと話す。

氏は奥田牧師と氏自らに関して「奥田さんと俺は太いパイプで繋がっているから」と強調する。支援機構のスタッフで、現在、市内の野宿生活者のために巡回相談している2人については「あんなヒヨコのことは知らんし」という。巡回相談員

に「声を掛けられたことはない」と氏がいう。しかし、巡回相談員の顔と名前は知っていた。そして何より以前、「あの丸い顔した相談員が来たけど、俺は何度来ても(センターに)入らんって言ったもん」と確かにA氏自身が言っていた。支援機構の活動を奥田牧師とともに古くから続けるスタッフ数名の名をあげみると、「ああ、〇〇さんは割と古いよね」「△△さんなら昔からやってる」とそれぞれのことをいう。また氏は支援機構の長年の活動に関して、「奥田さんたちがやっているから凍死するもんが減った。今ほとんどおらんよ」と語る。

活動を始めて比較的短いスタッフには批判的だが、長いスタッフには好意的のようだ。どちらにせよ、氏は支援機構のスタッフ個人個人に対して少なからず関心を持っている。

氏が、支援機構の葬儀を問題視して『官報』を熱心に調べていること、支援機構代表との「太いパイプ」を強調することからは支援機構に対する強い期待や親しみが伺える。氏は自身を、野宿しながら野宿者と支援機構を繋ぐ「パイプ」役と位置付けているのではないか。A氏のこのようなパイプの意識は一方的なものである。筆者からみると些細と思える繋がりを氏は「太いパイプ」と捉えている。このような些細な繋がりもA氏にとっては重要なのである。

元野宿生活者のある男性は、なごみ(註2)に集まっている人達に関して、「言っては悪いけどここにいる人たちは寄せ集めだ。ホームレスを抜け出したかと思ってるけど、ホームレスは一生ホームレス。(ホームレスをやっていた人たちは)人と関わるのは煩わしいという性質がある」と考える。「自分もそう。そういう自分の性格が嫌い」とも語る。

以上のように、この男性の語りからは「元『ホームレス』の人」と『『ホームレス』の性質を持つ自己』に対する嫌悪がきかれた。

このような「ホームレス」一般に対する否定的感情、および、「ホームレス」である自己に対する否定的感情が自尊心をおとしめ、他者との関係性の構築から彼らを遠ざけるといえるのではなからうか。

他者との関係、すなわち社会的相互作用と自尊心について、『自尊心の構造』の中で守口兼二は次のように記述している。

≪自尊心は、社会的相互作用を通じて獲得されるものである。(中略)けれども同時に、他者の評価

に依存したり、それを介してしか生存が不可能な人間にとって、自分への他者評価を維持し高めようとする心的傾向は、第二の自然と呼んでもいいほど強いものである。他者評価を高めたいと思う心から出発して、この心的傾向は自己統制力として内面化され、自己評価を高めたいと思う心へと発達する。発達した自尊心の損傷は、多くのひとにとって、自分の存在意味の失落を体験させるのであり、わるくすると救いようのない人格荒廃を招くことになる。》[森口 1993]

寝食を満たす程度に必要な最小限の即事的他者関係からは、野宿生活で傷つけられた自尊心を回復するのに十分な他者評価を得られない。以上の内容から、即事的他者関係を結ぶことの彼ら特有の原因について考えていく。

野宿生活者は「ホームレス」という「自業自得」観念に基づく支配的な負の見方を内面化することにより自尊心を傷つけられる。その自尊心は社会的相互作用を通じて獲得されるが、相互作用つまり他者と関わるにも、比較的そばにいる「(ほかのホームレスとしての)あいつら」と一体化されるわけにはいかず、「一般社会」を構成する人との間には「怠け者」のレッテルのもとに押し付けられた溝がある。

関係を築けないために自尊心を回復できず、自尊心を獲得できないために他者との関係性を再構築できないという悪循環がそこにはあるのではないか。

しかし、野宿生活者の多くが即事的人間関係の中で生きる原因は上記の自尊心という否定的要因だけではない。そこには彼らの生活体系、生活感覚に起因する合理的な理由が存在する。次章では、その内容について述べる。

第三章 即事的他者関係

第一節 定義

第二章で示した即事的他者関係の定義を前提に、第三章では野宿生活者に特徴的な他者関係の見られる場面を個人とグループに分類し、その原因について考察する。

野宿生活者の中には野宿生活者以外の人々と比較して、即事的他者関係しか結ばない人が多く見られる。本章では、彼らが他者とどのように接触するかの事例を挙げている。

第二節 個人にみられる即事的関係

《人物の紹介》

・ Bさんについて

50代ぐらいの男性。勝山公園に住みだして6、7年になる古参の居住者。A氏いわく背が高いから通称「ジャンボ」とよばれているのだという。公園内工事のため、12月初めにヤマ(註3)に移動した。センター入所の希望を出していたが選考にもれる。センターなどの支援をあてにはするが、市の支援策に対する批判は多い。

・ Cさんについて

60代前半の男性。筆者が公園のベンチで昼寝をするAさんが起きるのを待っていたところ、Aさんに話し掛けに来た。Aさんの胸ポケットから煙草が半分出ているのをにこにこしながら「盗られるよ」と指摘する。CさんがAさんに煙草をわけ2人で吸う。その後、またAさんの所へ行き、「梨あるけど食べる？」と声を掛ける。煙草のお返しのもりだろうか梨を水道で洗い、Aさんに渡した。積極的に他者の世話を焼くことを好む人といえる。Cさん自身は早々とセンターに入所し、センター内で快適に生活している。センター入所後は支援機構の募金活動なども精力的に手伝い、入所者やボランティアともよくうち解けている。

・ pさんについて

80代女性。夜は目が見えづらいという。しかし、歩行はしっかりしており、言葉もはっきりしている。色白で瞳が青みがかっていることに加え、夏場はネグリジェのような衣服を身にまとっていた。気が強くていきいきとした印象の女性。

事例

勝山公園居住の野宿生活者が公園内事情について話す内容として、元野宿生活者は生活保護を受給しだすと途端に公園に寄り付かなくなるという現象がある。これは公園内でも古株のBさんから語られたものである。確かに筆者が公園に幾度も通っている間、元野宿生活者が勝山公園を訪れる姿を見たことはない。話には、すぐそばのセンターから「暇だからたまに」来る人はいるとの話である。彼らの姿を園内で見るとすれば、炊き出しの手伝いに来る顔ぐらいである。それすらも数人だ。しかし、勝山公園から歩いて3分もかからない場所にある支援センターのNPO事務所には頻繁に彼らは訪ねてくるとき。

また、Bさん自身の他の野宿生活者との接触の頻度も高いとはいえない。筆者から見て、社会的でAさんや他の公園内居住者について比較的詳しいBさんだが、公園内の協力関係はごく最低限のものと考えている。実際Bさんでも日中はイヤホンをつけ、退屈そうに一人で散歩していることが多い。

もし、彼ら野宿生活者間に生活上の必要以上に何らかのつながりがあれば、元野宿生活者は困窮する現野宿生活者のもとを訪ね何らかの手助けもしょうのではないか。そもそも北九州市で実際生活保護を受給する人というのは高齢であるから、市内在住といえども公園まで来るのも大変なのではないかとも考えられる。一度野宿生活を脱して自分の生活が安定した人の大半が現在も野宿を続ける人々に関わる姿勢は、決して積極的とはいえない。むしろ、避けているという印象すら受ける。

また同様に比較的社会的なCさんに関しては筆者との間に次のようなやりとりがあった。

筆者が公園内のベンチでトランプを触っていると、Cさんがにこにこしながら現れた。筆者が新しく覚えた手品を見せると、その後、Cさんは「手品じゃないけど」と言ってマッチ棒や輪ゴム、五円玉を使い、Cさん言うところの「飲み屋芸」を見せてもらう。「昔、飲み屋でやっていた。おねいちゃん達に見せると喜んだ」と言う。筆者も、トランプでやる一人遊びを教えてもらった。「100回やって1、2回は合うかな」「暇つぶしにいい」「おじさんは一日中やって暇つぶししたりするよ」とCさんは話す。

このように、Cさんのような比較的社会的な人も、一日中一人遊びで暇つぶしをしている、という。

A氏が、暇な時間がありすぎる故に「普通の人にホームレスしろといっても一日ももたない」というほど、公園の野宿生活の1日は長いようだ。互いに暇を持って余しながら、なぜ彼らは最小限の関わりしか持たないのか。

事例

夏祭りの夜、公園内で筆者が声をかけるとpさんから「市役所はどっち？」と訊かれ、方角を考えていると「目がよく見えないから、手を引っ張って連れて行って」といわれる。間違っただけで違う方向に連れて行こうとすると、「市役所のほうよ。市役所の

ほうに行っているの？」「若い人がそんなんじゃ全然ダメ」と叱られる。正しい方向が分かったので世間話をしながら手を引いて歩く。私はその方向に用はなく、ただ誘導して再び公園に戻るつもりということ話を話すと非常に感謝される。

22歳という年齢に対して、「これからが一番いい時期ね。若いうちは何も分からないから男に騙されるのよ」という。「騙されたんですか？」と訊くと「色々あったのよ」とかわされる。筆者に対しては積極的に質問をふってくるが、pさんのことを尋ねてもうまくかわして答えてくれない。北区役所近くの橋のそばまで来ると「ここまででいい」と言われて別れる。

次の炊き出しでも会うが、私のことは覚えていなかった。22歳についてまた「これからが・・・」「いい人は・・・」と一連の話が始まる。炊き出しの列に知り合いの男性をみつけて寄っていき、横に寄り添って頭をなでられつつ仲良く並んで、上手に列に割り込む姿も見られた。

私の与える印象が薄いのか、彼女が物忘れをしやすい性質の人たちなのか、しかし、それらのことを勘案しても彼女の接し方が刹那的だとはいえないだろうか。この刹那的な他者との接触は、無計画に同じ人間に同じやり方で金を要求するqさんにも見られる特徴である。qさんに関しては以降で述べる。

ただし、本稿では野宿生活者全てが他者関係において、即事的だというわけではない。冒頭でも述べている通り、即事的他者関係を築いている人が特徴的に多いということである。北九州市内で野宿生活者の集中して住む地帯の1つに勝山公園内の通称「ヤマ」と呼ばれる一帯があるがこの居住者は比較的つよい協力関係にあるといわれる。

事例

リバーウォーク側にある小高い地帯「ヤマ」は、勝山公園でも中心広場から離れ、市立図書館よりも北側にある小高い地帯だ。ここには公園内でも比較的古くからいる人々が居住しており、Aさんいわく居住者が「14、5世帯はいる」という。ヤマでの居住者間の関係について、勝山公園に7年住み、ヤマの人とも親しいBさんにヤマについてきいてみた。ヤマでは何人かで行動をとることはあるのか、という問いに対しては「めったにない」と答えた。日常的な協力をする姿をみ

ることがあるのかという問いに対しては、「あんまりみない」という。しかし、「家を建てる手伝いをするにはある」そうで、「近所の2、3件で協力することもあるにはある」のだという。ただし、Bさん自身も他のヤマ居住者が家を建てる時には「手伝ってほしい」と言われれば手伝うが、言われなければ手伝わないという。前に建つブルーシートの家を見ながら「そのFさんなんかは(手伝いの人に)船頭されると嫌がる」のだと話す。

ヤマの協力関係はヤマ全体ではなく、近隣の数件によるものようだ。ただし、連帯も野宿生活においては必ずしもプラスに作用するとはいえない。ある支援機構のスタッフの話では、ヤマは古くから住んでいる人が多く、比較的団結が強いためか、センターに入所を希望する人が一人もいなかったという。

ヤマに居住しないAさんはヤマは強い連帯関係があるように話す。しかし、実際ヤマ内に住むBさんの話や、日中人が出ていても1人や2人で特に互いに話す様子もなく犬の世話や「小屋」まわりの片付けをする様子しか見られない。この点から、ヤマ内の居住者間の接触は外から思われているほど多くはないようだ。むしろ、必要にせまられた範囲内のものである。

公園以外で定住する人々の間には、より強い協力関係を築いている人々も見られる。支援機構によって炊き出し後に行われるパトロールについていくと、河川のそばにテントや小屋をたてて住む人々の間で近くに住む人と協力して生活する人々に出会う。その中の一組に、紫川沿いに長屋のような造りの小屋をたてて共同で住む男性2人がいる。パトロールで彼らのもとに回る支援機構の社員の女性によると、2人は現在の場所に来ておよそ2年になるが、それ以前から一緒に住んでいるのだという。一方が脚を悪くしているため、もう片方の人が近くのスーパーで廃棄されたパン等の「エサ」を2人分とりに行くのだという。脚の悪いほうの男性は元中華料理の料理人だったので、「小屋」の前には炊事場を自分で作っている。また、「小屋」の近くに家庭菜園をつくり、季節に応じて芋、白菜、プチトマト等もつくっている。(写真)

野宿生活者の中でも、橋の下等、河川のそばに定住する人々の間には他の生活形態の野宿生活者より強い協力関係が築かれるようである。しかし、

一方で川沿いに住む野宿生活者の中にも即事的な関係はある。これは前出の社員の女性から聞いたのだが、川沿いに居住するテントが近いある2人組がいた。一方がテントを空けるので帰ってくるまでの間という約束で、他方がその管理を任せられた。だが、結局出かけていった方が人がずっと戻らないままいなくなったという。

橋の下等の河川付近は近くに住む野宿者同士で比較的強い協力関係を築いている。この関係の強さには橋の下という場所柄が関係していると考えられる。橋の下は公園や駅近辺のように人目にさらされず、基本的に落ち着いた生活が出来る。しかし、人目につきにくい分、場所によっては中高生や酔っ払いに襲撃され易くもある。また、大雨の時には川が増水し非常に危険である。実際、上記の家庭菜園を築いている2人の「小屋」も一度全て流されてしまったことがあるという。しかし、少しすると彼らは再び「小屋」を建て、日用雑貨を集めていたそうだ。橋の下は、ダンボールで仕切って数人でかたまて住む人々もいるが、基本的に木材をつかってしっかりつくられた「小屋」が多いようだ。橋の下という場所は安定して定住し易いが危険も多い分、タフであるか周りの人と恒常的にうまくやっていた人以外住み続けられないのではないだろうか。つまり、即事的な他者関係ではやっていけない場所なのである。

個人の性質

なぜ彼らはそのように即事的他者関係を結びつづけるのか。野宿生活者が即事的他者関係を結ぶのは、野宿生活前から持ち合わせた個人の性質のためだろうか。本節では個人の性質が原因の一つと考えられるケースのうち、生い立ちにおける外的要因によってその日暮の生活感覚を身に付けたといえるA氏の事例を取り上げる。なお、この生い立ちの中に即事的他者関係をうむ性質に影響したであろう出来事が点在するため、生い立ちについて他の事例より細かく記述した。

A氏の事例

A氏は昭和22年(1947年)8月9日、長崎県北松浦郡佐々町でA家の三人兄弟の次男として生まれる。しかし小学校入学前、物心ついた頃には同県南松浦郡有川町(現在の新上五島町)のH家の養子として暮らしていた。

A氏の将来設計をもたず、その日暮の生活感覚

で暮らしてきた様子はその小・中学生時代から片鱗がみえる。A氏がそのようなパーソナリティを身に付けたのは、その語りからは環境によるところが少なくないようだ。

事例 小学生時代

小学一年の夏に養父に呼び寄せられ門司に移り住む。風師山と海に挟まれた恵まれた自然環境の中、小学生のときはほとんど勉強をせず海に山に遊びまわっていた。まわりの友達も勉強などしていなかったし、「そんな時代ではなかった、遊ぶことに忙しかった」という。

事例 中学生時代

中学入学後もあまり勉強をせず海と山に通っており、中学生であろうとも「まず遊ぶのが仕事だった」という。中学生になっても親にも先生にも「勉強しろ」とは一度も言われなかった。しかし、氏いわく彼が「遊びグループ」にいたのであって「勉強のできる子は勉強していた」のだという。

このように当時の氏がその後の進学や就労に備えて時間を費やすのではなく、その時遊ぶこと最優先の感覚でいたことは周りの人的環境によることもある。氏は上記のように自らが小学生当時は、「小学生が勉強する時代ではなかった」といい、中学生時代は「まず遊ぶのが仕事だった」と話す。しかし、一方で氏は自らが「遊びグループ」にいたのであって「勉強のできる子は勉強していた」のだとも言う。つまり当時の氏は、勉強する人も周りにいる環境の中で「まず遊ぶのが仕事」と考え、選択的に「勉強はせんかった」のである。

事例

また、中学卒業後も3年間は家でゴロゴロしており、父親の左官の仕事を半分手伝うという生活で、「親も誰も何も言わない。悪さしなければいいという時代。下町風ののびのびした感じ」と氏は当時自分が囲まれていた環境について語る。

しかし、姉弟ともに同じ養子という条件でありながら、二人のうち氏のみが随分自由に生活している。3年間ゴロゴロ遊んでいる一方で、義理の姉で一歳上のS子さんは当時既に門司の駅前の菓子店で働いていた。

このことで、氏は義姉に対するコンプレックスを持つようになったと推測できる。

養父が早く亡くなったため、頼る親戚は長崎の養母方の家になった。氏が小学校3年のとき、養母方のおば「アツコおばさん」がA氏に関して、『ねえさん、だからこの子はもらいなさんなって言ったでしょうが』と義母に言っているのを偶然聞いた。氏は小学3年生にして「悟った」という。次男で生まれ、「次男の性質が染み付いている」自分には、「家を継いで、位牌をうけとる器量は無い。私にそんな器量はない」と氏は考える。その後、氏は義母に「家は継がん。自由にさせてもらうから」とはっきりと言ってきたという。結局、昭和46年6月に再びA姓に戻る。A氏はこのときのことを「H家を素直に継いでおけばホームレスになることもなかった」と考えている。

氏の、この失望とも解釈できる「悟り」は以後に繰り返されえる転職行動や野宿生活に生活態度として影響しているのではないかと推測される。

一方で、同様に養子としてA氏とは別の家から引き取られた義姉に関して、アツコおばさんは高く評価していたそう。ちなみに養父母の位牌は義姉がひきとっている。義姉に比べ、一見自由奔放に育ったかに見える氏だが、幼い頃から内心義姉に劣等感を抱いていた様子が見えがえる。だからといって、氏は義姉を嫌っていたわけではない。むしろ、「ネエヤン」と呼んだり、継ぎ先の家にも頻りに泊まったりしていたことから、非常によく義姉を慕っていたといえよう。確からしいのは、養子先のH家で「旧家、本家なんかがあって家柄が違う」養母の実家が、幼い頃から氏にとって精神的負担だったことである。この精神的負担の存在が素地が、氏にいと簡単に養子縁組を解消させる一因だったのではないかと推測される。

事例 就職

中学卒業から3年後の昭和41年、友人のついで東京のH運送(有)に入社する。最初の3ヶ月間は助手として道を覚えたり、荷物の積み下ろしをしたりということに専念し、その後、会社が氏を自動車学校に通わせて普通自動車運転免許を取得させた。免許取得からの約2年間は橋本運送の運転手として都内全域を走ったが同社のすぐ近くに出来たO運送(株)に土地鑑を買われて引き抜かれる。A氏は野宿生活に至るまでずっと「ブラブラ」していたわけではなく、所々に1つの会社に落ち着いていた期間が存在する。

昭和46年の秋、義姉が結婚して母親の面倒をみるができなくなったため、氏は退職して北九州に戻ることになる。このときに職業安定所から失業手当を1年間受給している。昭和47年の2月に門司のS株式会社に入社し、ここで大型自動車免許を取得するがオイルショックの煽りを受けて入社から6年目の昭和52年に会社が倒産する。ちなみに、S運輸では月に35万円を稼いでいたがその約6年の間に家に入れたお金は父親の仏壇を買うときの分担金、3万円のみであった。その後、小倉でピンハネをしない善良な手配師に紹介され兵庫県明石市で季節工として半年間働く。このときにヘルニアになり、兵庫の病院に4ヶ月近く入院する。この間、母親から20万円の送金を受けている。手術後、医師より「丸一年間仕事はするな」といわれたため働かず、親に生活の面倒をみてもらっていた。母親は失業対策事務所で72歳まで勤めており、「孫にお年玉を渡すなど相当金を持っていた。賞与は相当貰っていた」と氏は振り返る。

門司では母親と二人暮らしであったが家にはほとんど帰らなかった。一週間のうち4泊5日を仕事の車の中で泊まり、その他は職場近くの姉夫婦の家にいりびたっていたのだという。義兄がそれを疎ましく思っていた様子もなかった。「あのころは家から仕事に通って家に食費を入れるのが普通だった」と氏は考えるが、自身はそれもしなかった。むしろ「働いていても親から小遣いをせびっていた。金持っているのを知っていたから」とにこやかに言う。そんなA氏のもとに母親は日曜日ごとに食事を持ってきていた。衣服は靴下までクリーニングに出すという生活だった。

A氏はこのように金銭的にも精神的にも義母や義姉から非常に甘く育てられていることが分かる。養父は出稼ぎで左官の仕事をしていたため家にはほとんどおらず、顔をあわせるのは盆と正月ぐらいだったことが義母や義姉に彼を甘やかさせさる一因だったのではないかと推測できる。原因はなんだったにしても、このような甘やかされ方が氏の即時的な生活感覚に何らかの影響を与えていると推測できる。

事例

この頃のA氏の収入は同世代の銀行員より高かったそうで、氏は自身の生活について「東京オリンピックが終わった頃(ドライバー業で)月3万5

千円しか貰っていなかったのが門司のS運輸時代には月35万円貰っていた。幅がありすぎて金銭感覚がおかしくなったのかもしれない」と考える。

東京オリンピックが開催された1964年からS運輸入社の1972年の8年間に氏の給料は10倍にもなった。このことは確かに氏の言う通り、彼の金銭感覚から生活感覚を狂わせる大きな要因であったろう。野宿生活に入る以前に、即時的な性格を形成する人も少なくない。しかしそれも上記の例のように何らかの外的要因がきっかけとしてある場合もけして少なくないのである。

野宿生活者には人間関係だけでなく、その生活感覚自体に利他的、即時的な面がみられる。この利他的な生活感覚こそが彼らの即時的他者関係の形成に影響しているのではないかと推測される。

野宿に染まらないための生活形態

野宿生活者の中には木材やブルーシートで頑丈な「小屋」を作り、布団、テレビ、コタツ、炊飯器、ラジカセなどを拾ってきては多くの所有物を抱える者もいれば、一方で「小屋」を持つことを頑なに拒み、所有物もかばん一つという者もいる。このテント小屋を作ること、多くの所有物を抱えることを頑なに拒む態度の裏には、野宿生活に染まることへの拒絶が伺える。

ここでは、公園内の同じ場所に1年以上住みながらあえてテント小屋を作らないA氏について事例をあげる。

事例

A氏は平成15年から勝山公園西門近くの花壇にダンボール等を駆使して雨風をしのぎながら生活をして1年程になる。勝山公園に居住する野宿の人の家のうち、ほぼ全てがブルーシートを使った小屋型である中で氏は敢えてテントにしない。「テントをはるのは面倒くさいというのもあるが、テントを張ると張らないでは違う。テントを張らないというプライドがある」と語る。「いつまでここにおるか分からん」という理由で「動きやすくちやいかん」と氏は考える。テントを「張れば身動きが取れなくなる」し、荷物が増える。出るときのことを考えると、荷物が増えるのは嫌なことなのだという。氏の荷物はかばん一つである。「あそこのゴミ箱見よっても、ダンボールやら毛布ぐらいなら持っていくけど、ブルーシートやら

角材は掃除のおばちゃんが持っていかんもん」「まずここ出て行ったもんで、自分の物片付けていったのはごく僅かやもん。ヤマのもんでもこの辺のもんでも」つまり、荷物を残していくという行為が嫌なのかと尋ねると、A氏は「嫌じゃないよ。嫌じゃないけどテントは、はなっからようせんもん。昔から」と答えた。

この、最低限の荷物しか持たない、自分の去った後の荷物の片付けで他人に負担をかけない、ということと、他の野宿生活者と消極的にしか関わらないことには何か共通する意味があるのだろうか。加えて、氏は「ブルーシートはいやらしい」のだという。「いやらしい」というのは「住み着いてる」という感じがするからか、という問いに対しては「いやそうじゃなくて、いやらしいって。自分の性に合わんもん」と答える。何故いやらしいと思うのかについては、いくらしつこく訊いても「いやらしいもん」としか返ってこなかった。女性の話から犯罪歴まで話してくれた氏が、このように頑なにその訳を話してくれないのはなぜか。言いたくない理由があって、敢えて話さないのか。それとも、氏自身ははっきりした理由がわからないが、生理的嫌悪から「いやらしい」と感じるのか。これらの氏の行動からは野宿生活に染まることへの拒絶が伺える。

その日暮らしの生活感覚

ここでは同じやり方で同じ人間に何度も金を無心するrさんの事例を挙げる。この事例中の彼女の行動には計画性の無い、刹那的な生活感覚があらわれている。

・qさんについて

自称「q」と名乗る60代後半と思われる女性が公園に現れる。こちらから挨拶すると、「奥さん今一人？」と尋ね、隣に腰をおろす。野宿の人に多く見られる肌の焼け方で、上の前歯が無い。炊き出し場所でも嗅がれるのだが、人間がしばらく風呂に入らないときの臭いを発していた。言葉やイントネーションからもともと東日本の人と思われる。

事例

天気の話などしていると、愛想よく「奥さん、葡萄すき？（自分は）平尾台の方から来たんだけど、葡萄がたくさんあるところを教えてあげる。

どこから来たの？」「北方です」「そうなの。じゃあ、明後日持って来てあげる。それで悪いんだけど平尾台まで帰るのに千円ないから貸してもらえない？明後日返すから」と言われる。少し考えてから了解し、手帳で確認して会う約束をする。「4時にどこに行ったらいいですか？」「北方のバス停の本屋さんのところがあるでしょ」「G書店ですか？」「そうそう」。そんなやり取りをしつつ、財布から千円を探していると、「平尾台まで二千円かかるだけどいい？」「あー、二千円は持ってないですね」「じゃあ、千五百円でいいからダメ？」「あー、それもちょっとないですね」「じゃあ、千円貸してくれる？明後日返すから」と言われる。そこへ自転車に乗ってチリンチリンと鳴らしながら近寄って来た中年の男性は何か言いたげだったが、rさんがその男性の目をじっと見つめ数回頷いて何か一生懸命伝えようとしているので（おそらく本人はさりげなく目で合図したつもりと思われる）、何も言わずにまた自転車を走らせて去っていった。男性が去るとqさんはひそひそと「今自転車で人が来てビックリしたでしょ？ここはホームレスが沢山いるから奥さんも気をつけて」と言うのだった。千円手渡すと「ありがとう。帰れなくて往生してたの。またね」と言い、そそくさと公園を出て行ってしまふ。約束の日、G書店前のバス停のベンチできっちり1時間待ったがqさんは現れなかった。

qさんとは公園で会った約1ヵ月後、勝山橋のバス停で再び遭遇した。qさんは私のことは覚えていない様子で今度は「バスカードが行きで切れちゃった」から300円貸してと言ってきた。少し考えて、「お金はお貸しできるのですが、私は学校で野宿生活について勉強しているので、少しお話を伺えませんか？」と願い出ると、それまでの積極的な態度とはうってかわり「いいです、違うから、いいです」と慌てて離れていってしまう。その後、離れて見ていると、qさんは場所を変えることもなく、同じ勝山橋のバス停でバスを待っている50代位の女性に私にしたのと同様に声を掛けていた。

それから更に1ヶ月半後、再びqさんに声をかけられた。今回は市立図書館前であったが、やはりqさんは私のことをおぼえていなかった。「バスカードがきれちゃったから」今回は200円貸してほしいといわれ、そのかわり「明後日大根持つ

てきてあげる」といわれた。財布の中をさがしていると、「500円いい?」「300円いい?」と前々回と同様のやり方で交渉が行われた。大根を受け取る時間帯を訊くと「今ごろの時間」と時計を確認することもなく、即答した。

qさんの言う「バス代を行きで使い果たし帰れなくなった」という理由や、相手が金を出すと分かると一気に額をあげ、その後様子を見ながら値段交渉をするというやり方が変わらないことから、qさんは帰りのバスなど乗らず、ただ金の無心をしているとしか考えられない。

ここでqさんにとって重要なのは相手が以前、声を掛けたことのある相手か、相手が自分を覚えているか、否かではない。qさんにとって重要なのは、「その時」に金を取れるか、取れないか、なのである。約束を約束として成立させていない点、人との関係を以後のことを全く考えずに結んでいる点で、彼女の生活感覚は非常に刹那的といえる。qさんのこのような刹那的他人関係の原因の1つとして、その生活形態に関係する無駄なことに割く余裕のなさが考えられる。

無駄なこと(余剰な関わり、雑談など)に割く余裕がない

多くの野宿生活者は精神的にも物質的にも困窮した状態にある。北九州市内には、炊飯器やコタツや事務機などを所有し、地域住民とも良好な関係を築いている者もいるがそれはごく少数であり、大多数は何らかのかたちで困窮している。野宿生活者の生活の困窮に関してNPO法人ホームレス支援機構が2003年12月に発行した「あんたも わしも おんなじいのち 第4号」にはつぎのような記述がある。

「九州といえども冬は厳しい寒さになります。氷の張るような夜、公園や路上で寝ることは大変です。凍死するホームレスもいます。70歳を過ぎたある男性ホームレスはあまりの寒さに耐え切れず延焼を防ぐため、わざわざ公園にゴミ袋を運び火を点け、そのまま警察に出頭しました。彼は、放火の現行犯として逮捕されましたが「あまりの寒さに耐えられなかった。刑務所の方がましだと思った」と裁判で証言しました。放火は犯罪です。本人もよくそのことは知っていました。しかし出口のない極寒の夜に彼は絶えられなかったのです。彼らの多くが、コンビニエンスストアから廃

棄される期限切れの弁当でいのちをつないでいます。ホームレスの増加は、熾烈な弁当争奪戦を引き起こしています。高齢者など力の弱いホームレスは食べるだけでもギリギリです。またたとえ廃棄弁当にありつけても、これらはそもそも「ゴミ」なのです。「食べられるから良い」ということで済ませられるでしょうか。それは人権感覚の問題です。あなたなら「好きで」食べられますか。夏場は腐敗と食中毒に怯え冬場は拾ってきた弁当が凍りつく。

(中略)ある年の初夏。駅で寝ていた男性ホームレスを訪ねました。たまたま前週に新しいアンダーシャツを渡したところでした。行ってみると新しいはずのシャツが赤黒く染まっています。「どうしたの?」と尋ねると「シラミが湧いている。痒くてたまらない。かきむしって全身が血だらけになってしまった」との事でした。シャツは彼の血液が染み込み赤黒くなっていたのです。シャツを脱ぐと上半身全体にシラミによる湿疹とかさぶたが広がっていました。

そんな実情をあげると切りがありません。最近では、暴走族や近隣の若者たちによるホームレス襲撃、テントへの放火も相次いでいます。》[奥田2003]

上記のような困難な状況が多少の個人差こそあれ、大多数の野宿生活者にとっての現実である。先の見通しのないままこのような現実に晒されるならば、追い詰められないことのほうが不思議である。このような状況下では一見無駄と思える余剰な関わりを積極的に持つエネルギーも奪われてしまうだろう。

第三節 グループにみられる即時的関係とは

野宿生活者の中には食料の獲得や襲撃からの護身のために数人のグループを形成する人々がいる。食料の獲得に関して言えば、グループ内で分担を決めることで単独で行うよりも広い範囲を回ることができる。支援機構によると、襲撃をうけるのは単独に住む人が多いということであるから、危険の多い野宿状態では、グループを作って参加することには大きなメリットがあるといえる。

ここでグループに属さない人としてDさんの事例を挙げる。

・Dさんについて

160センチないと思われる小柄で痩せた男性

で作業用のズボンに長靴、暖かそうだが大きすぎる上着を着込んでいる。歯がほとんど無く、くしゃつとした顔の印象から70代以上と思われる。勝山公園から歩いて数分の公園の屋根のある東屋がおそらく生活の拠点だが、荷物の形態や団地内の人目につく東屋という場所柄から周囲の目を気にしながらの必要最低限の利用と考えられる。毛布や傘、靴、いっぱい物の詰まった白いビニール袋等、全部でも両手で十分抱えきれ程度の荷物がきちんと整頓されて置かれている。

事例

支援機構のベテランで、みんなに声をかけるボランティアの女性がいつもの大きな声で話しかけるがDさんは無視をして顔を背けた。近くには4、5人で新しいタバコを分けあって雑談する輪もいくつかあったが、Dさんは一人吸殻の入った小さなケースから吸殻を一つ取り出して吸おうとする。しかし足元に落ちていた別の吸殻をみつけると、それを拾って火をつけ吸い出した。弁当と味噌汁を受け取った後、少し離れたベンチでDさんが味噌汁を飲んでいると別の野宿の男性が同じベンチに来て声をかける。Dさんはそれにも応じず味噌汁を飲み終えると弁当を持ってさっさと公園を出て行ってしまふ。

小柄で高齢ながら作業服を着て自力で頑張っているDさんは、周囲から支援の厚意を引き出すようだ。しかし彼はこれらの厚意を頑なに拒む。彼もKさんと同じように自立心が強いタイプのものである。しかし、その高齢では仕事がないのが現状であろう。彼の場合、北九州市の生活保護支給対象の65歳以上の条件も軽々とパスしているはずである。おそらく支援機構にとっても彼は支援住宅入居対象者になり得よう。しかし希望しない人を無理やり入所させるわけにもいかない。

落ちていた吸殻を拾って吸わなくてはならない状況とは物質的に非常に困窮している状況とはいえないだろうか。

また、グループに参加しないということはごく少ない接触で何らかの情報が得られたとしても、得られる情報が断片的になり、情報不足に陥るというデメリットがある。情報が不足するだけでなく、それきりしか会わないとなれば、責任を追究される心配も少ないため、適当な、また感情任せなデマ情報を流す者も出てくるであろう。野宿生

活者同士で市や支援機構の支援策について話題に上げることは多い。私も彼らの口ぐちから、それらの支援策に対する考えをきいた。ここで毎回気になるのが、彼らの持つ情報の不正確さである。しかもそれらはたいてい市や支援機構については悪く歪められている。彼らの生活形態においては、口伝えの情報が生活においても非常に重要であることがわかる。ここで、グループに参加していても、そのグループが即事の特徴を持つなら情報もいい加減なのではないかとも考えられる。しかし、即時的他者関係においては生活に必要な限りの接触はあり、同じグループの者にいい加減な情報を与えては、情報を与えた本人にとっても不利益になる。よって、グループ内での情報が意図的に歪められることは少ないといえよう。

グループ外でやり取りされる、この歪められた情報は彼らを支援利用から遠ざけ、彼らにとってマイナスに働く。

このように、Dさんの生活の一端からはグループに属さないことがいかに不利かがわかる。

では野宿者内で形成されるグループとはどのようなものか。ここでは現在はアパートに住み、支援機構の活動にボランティアとして熱心に参加しているEさんの所属したグループを例にみながら考察する。

・Eさんについて

Eさんは60代半ば、親方気質の男性で、野宿時代から今に至っても面倒見がよい。支援住宅を経て、現在はアパートを借り、「自立」生活を送っているが「ホームレスの頃は暇なんかなかったけど、今は暇」だそうで、支援センターに勤める支援機構スタッフの話では、センターに頻繁に通ってくるという。

事例

野宿生活者の社会では食料を獲得するために数人のグループが形成されることがある。しかしこのグループは流動的で、即事的なものが大半のようである。Eさんの所属していたグループはメンバーが入れ代わりながら、基本的に5～8人から成っていたという。グループ内ではそれぞれ、担当の店を決めて、それぞれが「エサ」をとりに行く。Aさんのグループでもフライドチキンやパンの担当がいたという。Eさんは食料を店長と顔見知りになり、交渉して獲得していたという。それ

ぞれが獲得してきた食料を分配していた。Eさんというにはグループは「エサをとるためだけ」の関係という。なお、「エサ」をとりに行くグループ内でも、時には日雇いの仕事が入る者が出る。日雇い仕事の賃金を得た人はグループ内の他のメンバーに賃金から少しずつ渡したり、「つかいっばしりで買い物に行かせてその釣りを遣」ったりするのだという。ただしこれは、自らが賃金収入を得られなくなった際に再び「エサ」を分けてもらうために行う行為であり、精神的に強い繋がりがあるという意味ではない。グループはEさんが所属していたもの以外にも存在し、「別のグループにエサをとられて、喧嘩になったこともあった」という。

グループへはどのように参入していくのかをたずねた。Eさんのグループでは「エサをとれずに一人で困ってるやつ」を誘い入れる形態だった。ただし、困っていれば誰でもグループに入れるわけではない。「『おまえら何持っとおとや』やら言う横着なやつは入れない」のだという。一方出て行くときに多いケースは「もっといいエサの場所を見つけたら来なくなる」というものだと当然のことというように話す。

彼らの中では「もっといいエサの場所を見つけたら来なくなる」ことが黙認されている。

この点から彼らの間には流動的で互いを縛らない、ゆるやかな関係が築かれていたことが伺える。

また、Eさん達は「おい、大阪」などというように、お互いを出身地名で呼び合ったという。それは親しみを込めたあだ名というよりは「本当の名前を言わない人も多いから」だった。また、野宿生活者の中には借金を抱えて追われる身の人も少なくない。あだ名で呼び合う習慣は、おそらくそのことを配慮しあうことで生まれた暗黙のルールであったのだろう。彼らの関係は即事的である。しかしそのことは、必ずしも負の要素ばかりではない。困窮する他の野宿者を救い入れ、出て行くときも束縛はしない。彼らのグループが流動的、即事的に成っていることは、互いの生活の困難さを理解したゆえであると考えるのが自然ではなからうか。

第四章 考察

本稿では「継続性がなく当人が寝食を満たすために必要なときに限り持つ、必要最小限の関わり」を「即時的他者関係」と定義し、その性質と原因

について考察してきた。即事的他者関係において彼らは人とのやりとりは場当たりの・断続的で、グループの入れ代わりは流動的である。北九州ホームレス支援機構の活動を特徴づけるものとして「関係性の回復」というテーマがある。これは野宿生活者の多くが人格関係の喪失(ホームレス)状態であることを前提としている。

野宿生活者が社会資源や家族との関係を絶たれた状態であることは、筆者も支援機構の社員となって活動に参加する中で実感した。しかし、かれら野宿生活者は人間関係すべてを喪失した状態にあるわけではない。実際野宿生活者内には他の野宿生活者との間に協力関係がある。ただその関係が即事的なのである。北九州産業社会研究所の調査でも回答した野宿生活者の約8割の人が「まわりにたくさん人がいるが、いざとなれば頼れる人はいない。みんな結局はひとりぼっちだ」と答えている。このことから、当事者がその希薄さを自覚した上での関係ということが分かる。

第二節では「自業自得」観念と自尊心という点から、即事的な他者関係の原因を考えている。野宿生活者は「ホームレス」という「自業自得」観念に基づく支配的な負の見方を内面化することにより自尊心を傷つけられる。その自尊心は社会的相互作用を通じて獲得されるが、相互作用つまり他者と関わるにも、比較的そばにいる「(ほかのホームレスとしての)あいつら」と一体化されるわけにはいかず、「一般社会」を構成する人との間には「愈け者」のレッテルのもとに押し付けられた溝がある。関係を築けないために自尊心を回復できず、自尊心を獲得できないために他者との関係性を再構築できないという悪循環がそこにはあるのではないかと、いうものである。

しかし野宿生活者の多くが即事的他者関係の中で生きる原因は上記の自尊心という否定的要因だけではない。そこには彼らの生活体系、生活感覚に起因する合理的な理由が存在する、として第三章では、個人とグループそれぞれで見られる即事的といえる希薄で、必要最小限、刹那的という3点特徴をあげ、その原因について考察した。原因として、個人では、本人が生い立ちの中で持ち合わせた性格のほか、野宿という生活体系に由来する、その日暮の生活感覚、余剰なことに割くような余裕が無いことを挙げた。グループでは、その形態が流動的であること、それには合理的な理由

があることを述べた。

「ホームレス」と呼ばれる人々は野宿生活に入る以前から、本人の性格が場当たりの刹那的だから、「ホームレス」になったのであり、その結果は自業自得だと見る風潮がある。しかし、当事者と接していると、その即事的な他者関係というのは野宿という生活形態にも由来していることに気付く。よって、その即事的な他者関係は生活形態が野宿でなくなることで、変化していくものと考えられる。

第五章 結論

以上で述べてきたように、北九州市内の野宿生活者の間には、即事的な他者関係が見られる。この即事的他者関係は、野宿生活前から持ち合わせたパーソナリティ、自尊心に絡む問題だけでなく、分断された時間や流動的なグループ形態などに由来する、その日暮しの生活感覚という彼らの世界観によるところが大きい。この世界観のもとで彼らは将来設計、未来のビジョンに欠けている。

即事的な他者関係はその生活体系に即して築かれていったからといって、看過できるものではない。刹那的感覚で将来の見通しを立てず、未来に拘束されない。将来の行動を良くも悪くも拘束するのは、将来も自分と関わる事が予定される他者の存在ではなかろうか。即事的な他者関係しかもたなければ、将来の設計も持てなくなる。一般的に野宿生活者は家族との関係を絶っていることが多い。借金など必要に迫られて絶つこともあろうし、わずらわしい、もしくは迷惑をかけるという理由で絶つこともあろう。第二章で述べたように、A氏は1年以上の官報調査を続けている。氏の目的は調べること自体なのであり、その結果は何に利用するわけでもない。A氏の、ただ調べることだけが目的だといっている官報調査には、会わない、会えない家族でもその存在が彼の拠り所であり、死亡した際には知って欲しいというせつない希望があるのではないか。

人間は自分が生きていることに意味を与えたがるものだ。

《人が死んでのちに残るのは、集めたものではなくて散らしたものである》(ジェラルド・シャンドリー)という言葉がある。財産をかき集めること、不動産としての「家」を所有すること、より希少で高価なものを消費し、所有することを人は

自分の生きた意味とするのだろうか。そうではなく、やはり人間は散らすこと、つまり伝える対象、与える対象こそ必要とするのではなかろうか。それが不特定多数の人もいれば、一人の人もいだろう。A氏は筆者の、卒論のために生立ちをきかせてほしいとの申し出に快諾し、翌日には自らの職業遍歴を隙間なく紙に書き出し、3時間に渡り話し続け、顔写真も撮らせてくれた。自分のことを喋るのが嫌いな筆者には、Aさんをはじめ野宿の人たちが、なぜそのように自らの極私的なことを喋ってくれるのか不思議でならなかった。野宿の人たちだけではない。ベンチに座っていると、野宿でない人々もやってきては、論文の構想を練ってくれる人もいれば、死別した妻との馴れ初めから喋っていった人もいた。彼らが暇を持て余しているからだろうと指摘されるかもしれない。だが、暇だろうと、忙しかろうと他者に語るという行為にかわりない。それが受け手である筆者が必要とするかどうかは別にしてもである。思うに家庭や学校、職場に属することの意味は、与える対象がそこに確保されていることにあるのではないだろうか。与えることには与えられることよりも多くの意味づけができる。そして、与えられる側よりも与える側のほうが能動的に動く分だけ、そのつながりを意識できる。将来の見通しというのは、自分が他者とのつながりを意識するから持つものではなかろうか。

将来に対する意識をもつには、分断の状況にある、彼らの他者関係・生活感覚をつなげていくことが必要である。時間的に分断された生活感覚がつながることで、即事的な他者関係は変化してゆくと考えられる。

では、そのためには具体的にどのような支援をできるのだろうか。この点に関しては、将来の見通しの面、与える立場に立つ機会の面という両側面から2つの案を提示する。

将来の見通しの面では野宿生活者個々人に手帳を配布してみてもどうか。さらに支援機構の炊き出し、「お風呂大作戦」や夏祭りの年間計画を公表し、先の見通しを立ててもらおう。先の予定に縛られて生活する一般の人々には些細なことであるが、暇を持て余す単調な毎日を繰り返す人に与える影響は小さくないだろう。

与える立場に立つ機会については、彼ら自身と与える立場に立つような行事を行ってはどうか。

例えば支援機構が毎年行う夏祭りや新年炊き出しなど祭りの要素が含まれる行事の企画・運営を、野宿生活者とともに試みるのである。当然、自由に決められることにも一定の制約が必要であるし、野宿生活者にとって過重な負担とならない程度の委任に抑える必要がある。先述した通り野宿の人の多くは困窮した状態にあるし、2003年のアンケート調査からは聞き取りした約8割の人が「仕事をして自立したい」と回答している。支援策が負担となり、彼らの望む「自立」を阻害するようでは本末転倒である。

他者との恒常的な関わりを持つこと、将来に対する意識をもつことのためには、分断の状況にある、彼らの他者関係・生活感覚をつなげていくことが必要なのである。

(註1) 『官報』とは、法令・予算・告示事など政府が一般国民に知らせる必要のある事項を編集して毎日刊行する文書のことである。

(註2) なごみ・・・支援住宅のあるアパートの屋上にある一室。月・水・金曜日の午後に入居者や自立者の憩いの場として開放されている。その他、体操や音楽プログラムを行う場所としても利用されている。

(註3) 「ヤマ」とは、勝山公園でも中心広場から離れ、市立図書館よりも北側にある小高い地帯。「ヤマ」には比較的古くからいる人々が居住しているという。

謝辞

本論文を書くにあたり多くの人にお世話になりました。ここに一言お礼を述べたいと思います。

はじめに、公園や橋の下で野宿を続けるみなさん、元野宿をしていたみなさんは、野宿生活や生い立ちについて、丁寧に話してくださいました。おそらく失礼な所の沢山あった私の質問にも温かく答えてくださり、大変感謝しています。

そして、外国語学部国際関係学科の稲月正先生には、ホームレス実態調査の貴重な資料を提供していただきました。ありがとうございました。

北九州ホームレス支援機構の皆さんにも多くの場面で助けて頂きました。野宿の人たちから強く信頼される支援機構の活動に参加する中で、おそら

く私一人では知ることが出来なかった野宿の人たちの様々な姿に出会えました。

最後に、竹川大介先生をはじめ、ゼミのみなさんには貴重な時間を割いてたくさんのご助言を頂きました。本当にありがとうございました。

参考文献・引用文献

NPO 法人ホームレス支援機構 2003

『あんたも わしも おんなじいのち 第4号』

野口道彦、柏木宏編 2003

『共生社会の創造とNPO』 明石書店

岩田正美 2000

『ホームレス/現代社会/福祉国家—「生きていく場所」をめぐって』 明石書店

森口兼二 1993

『自尊心の構造』 松籟社

児玉徹 2003

『岩波ブックレット NO.591 ホームレス問題 何が問われているのか』 岩波書店

ケン・マプラー 1991

『生活記録の社会学—方法としての生活史研究 案内—』 光生館

北九州市保健福祉局生活福祉部保護課 2004

『北九州市ホームレス自立支援実施計画』

図1 性別

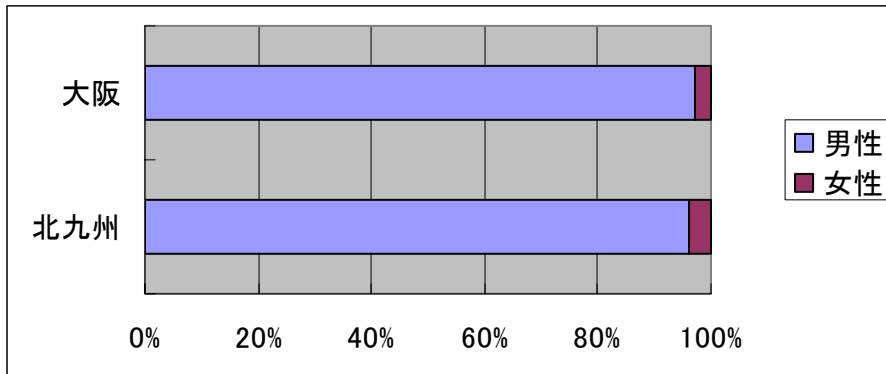


図2 年齢

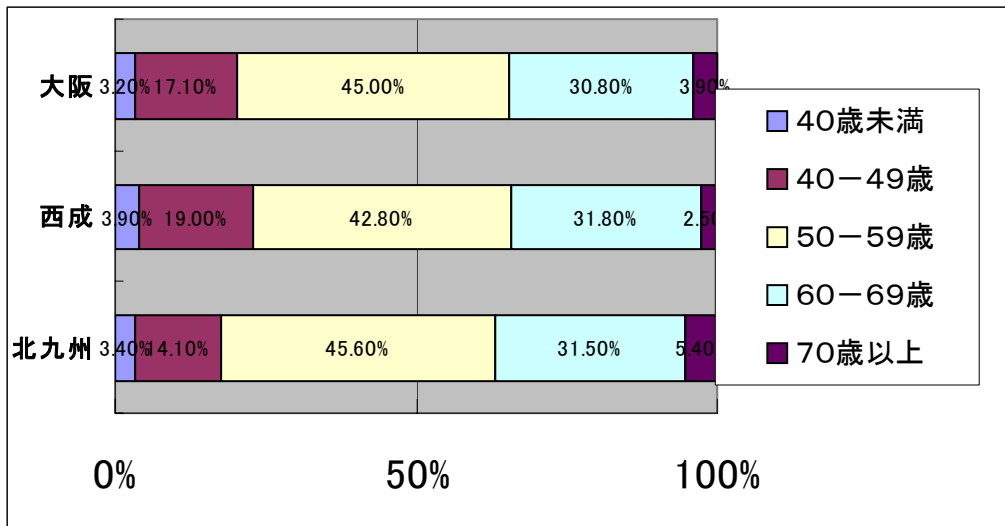


図3 出身地

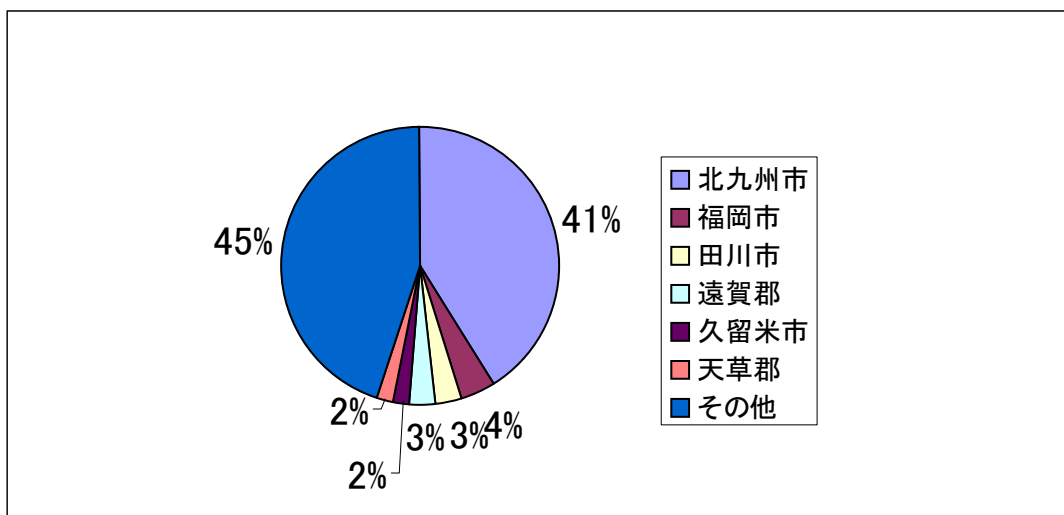


図4 野宿期間

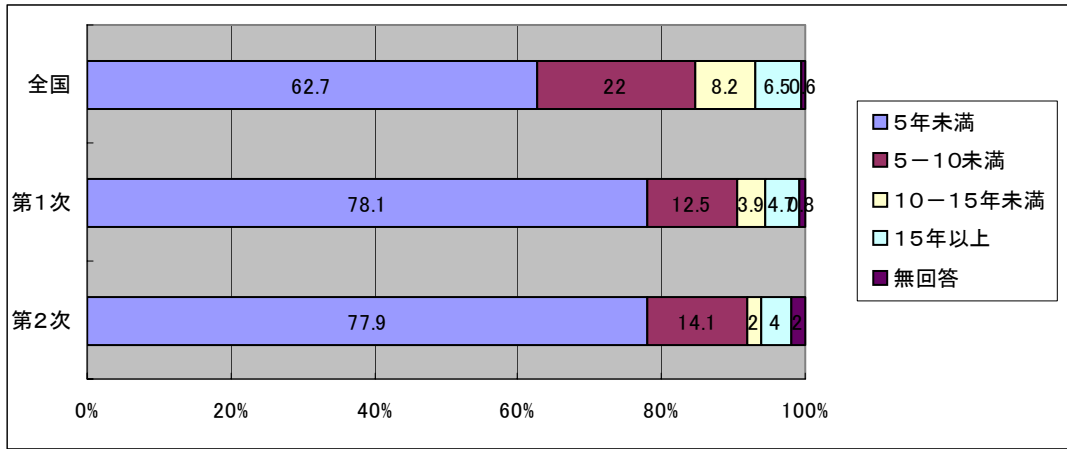


図5 野宿期間（5年未満）

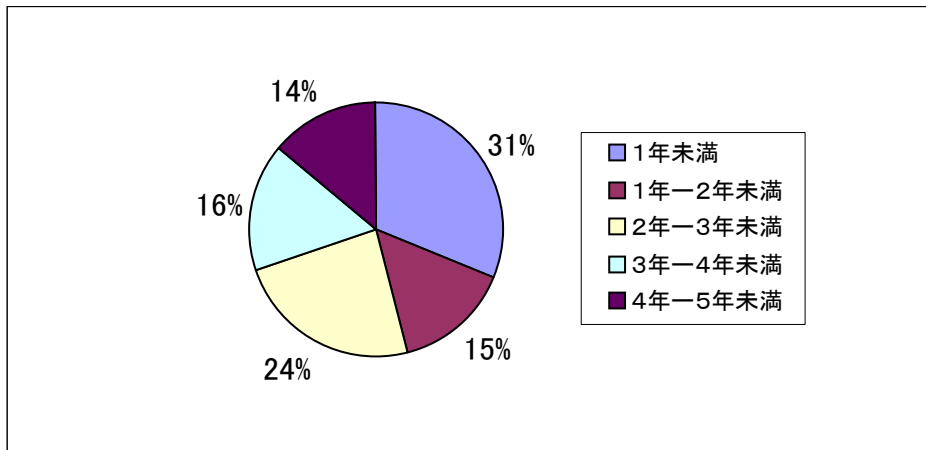


表 1

北九州

圏名	県名	度数	%	%
北海道	北海道	2	1.3	1.3
東北	秋田	1	0.7	1.3
	宮城	1	0.7	
中部	新潟	1	0.7	2.1
	静岡	1	0.7	
	愛知	1	0.7	
近畿	京都	1	0.7	2.7
	大阪	1	0.7	
	兵庫	2	1.3	
中・四国 (山口を除く)	愛媛	2	1.3	3.3
	鳥根	2	1.3	
	広島	1	0.7	
九州・山口	山口	14	9.4	89.3
	福岡	86	57.7	
	佐賀	3	2	
	長崎	7	4.7	
	熊本	7	4.7	
	大分	2	1.3	
	宮崎	5	3.4	
	鹿児島	7	4.7	
	沖縄	2	1.3	
合計		149	100	

大阪

圏名	県名	度数	%	%
北海道		13		2
東北		22		3.3
関東		44		6.6
中部		56		8.4
近畿	滋賀	4	0.6	28.3
	京都	9	1.4	
	大阪	119	17.8	
	兵庫	34	5.1	
	奈良	11	1.7	
	和歌山	9	1.4	
	不明	2	0.3	
中国		79		11.9
四国		80		12
九州		178		26.8
外国		4		0.6
合計		664	100	

北九州市立大学北九州産業社会研究所

2004 年

勝山公園と「ヤマ」位置図



